

復刻版

東京孤児院月報

◎1899年→1912年

全三巻・別冊一・付録一

揃定価〓本体八〇、〇〇〇円十税

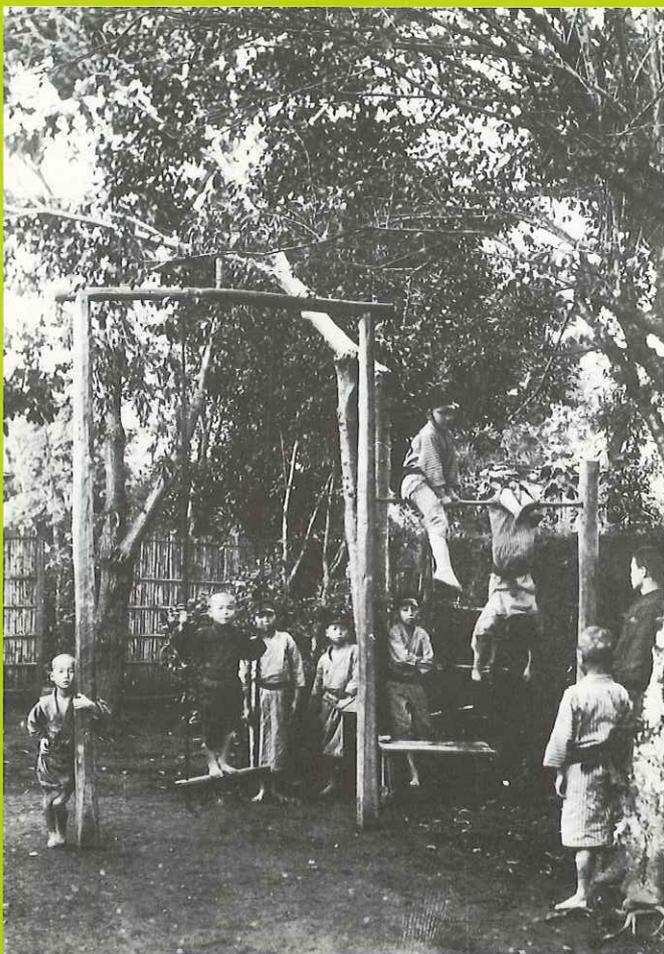
発行〓使命社／東京孤児院／東京育成園

解説〓丹野喜久子

推薦〓吉田久一

仲村優一

近代児童福祉の原点!



東京孤児院月報

身よりのない子どもをただ「収容」するのではなく、

ひとりひとりの子どもの人権を中軸に据え、

「家庭」として子どもたちを受け入れ、育てた

東京孤児院〓東京育成園。

平等と人権、反戦・平和を基調としたその理念は、

ようやく表面化してきた児童虐待の問題や

子どもの福祉一般について、今もなお大きな示唆を与える。

社会福祉のみならず、児童教育・社会思想史

研究にとつても第一級の資料である!



東京孤児院月報

第 壹 號

行 發 日 十 一 月 每

丁種	七拾五番	東京孤児院
乙種	五拾五番	東京孤児院
丙種	三拾五番	東京孤児院
丁種	一拾五番	東京孤児院
戊種	五番	東京孤児院
己種	一	東京孤児院

東京孤児院

人生悲惨の事多しと雖も生れて卒々たる孤児となり、活きて零々たる貧乏にして處る者の悲惨なるより惨なるはなし、天下の廣きとてして、尙敷るに人なく、托するに處なく、流離顛沛、早く己に世路の辛酸を聞き、落魄喪心、憫々として道途に彷徨するものあるを見ては、誰か惻愍の情に動かされざるものある。而も東西深淵の間天の性情伸ふるに由なく、陰險、嫉妬、忌憎、無耻の野性、徒に其心に増長し來り、加ふるに恐るべき社會の弊風を以て之を誘惑し去る。世等終に罪惡の子とならざらんと欲するも勢ひ得ざるべきにあらざるや。其乞食の徒に落ち、掏摸の群に伍するは猶未たしなり。不其當年の少年、豈他日放火殺人の凶徒と化し了らざるを保すべけんや。事于茲いたりて其罪惡の影響に恐怖するも己に運しと謂ふへきなり。孤貧兒の救養は之と人道の大義に省るも、之を社會公安の道に鑑るも、寔に一日も忽せにすへからざるにあらざるや。

本院は昨州二年の設立に係るも、其由來は遠く廿九年中にあり。彼の悲絶慘絶を極めたる三陸大海嘯の際、其被害地より不幸孤獨となれる孤児廿有餘名を收容せるものありしか、昨年に至り其半を引継ぎて本院を起し、爾來貧窮養ひかたき貧兒とも收容し現在十五名を救養しつゝあるものなり、事業未だ小にして基礎亦全く堅からず加ふるに薄徳非才の身を以てすも、唯、聊人道と社會とに貢獻せんと欲するの赤誠に至りては敢て渝らざらんとを期するもの也。

然りと雖、事業の至難に属すると共に、經費亦多額に渉らざるを得ず、而も不幸にして本院に一定の収入なるもの甚だ稀少にして、經營知る難めるの次第なり。大方仁愛の人士俟て請ふ、賛助員の増加に大助を加へられんとを。敬畏謹言。

●入院資格 ○孤兒又は貧兒にして四歳以上十四歳以下の者は何國を問はず之を收容す
●教育 ○學齡に達したる者は之を小學校に入學せしめ前途見込あるものは漸次高等教育に就かしむ、院内に在りては居常其徳性を啓發するに勉む
●賛助員 ○毎月金圓を寄附せらるゝ、人士を以て賛助員と稱し左の名稱を以て永久に保存す
一 毎月金壹圓 圓以上寄附 名譽賛助員
一 毎月金壹圓以下五十錢以上寄附 特別賛助員
一 毎月五拾錢以下十錢以上寄附 賛助員
●一時寄附 ○隨時金圓を寄附せらるゝ、人士は左の名稱に従つて永久本院の記簿に保存す
一 一時金拾圓以上寄附 名譽惠與者
一 一時金五圓以上寄附 特別惠與者
一 一時金五圓以下寄附 惠與者
●物品寄附 ○物品の寄附も亦永久 本院の記簿に保存す

●目的 ○本院は無告の孤兒を救養し、之に自活の途を與ふるを以て目的とす、貧窮にして専ら教育する能はざる者の子は其情狀に依り入院を許すことあるへし
●維持 ○天祐の下に院内各目的の労働と内外慈善家の寄附金品とに依り永久に維持擴張す

●一八七七年
●二コソイ、ハリストス正教(ギリシヤ正教)の布教活動を開始
●一八九四年
●日清戦争
●一八九六年
●三陸地方に大津波がおこる。父母を喪つた孤兒二六名をハリストス正教徒、但木鶴が麻布区斧町に引き取り、「孤児教育院」を創立。概則では但木の牛乳販売と寄付によつて經費を賄つてゐる
●一八九七年
●孤児教育院 経済的に窮乏
●教会で窮乏を知つた北川波津が孤児教育院役者となつて但木を支援
●北川、実質的に院の運営を任せられるが、塩をなめ湯粥を食すという貧窮困苦に陥る。教会内外に義捐金を募集
●一八九八年
●牛込区原町に移転
●北川波津、男子院児と納豆の行商をはじめ
●二月、山田蔵太郎「使命新報」創刊。孤児教育院の日常を紹介
●一八九九年
●但木、北川に院を譲渡
●四月、孤児教育院の改革により「東京孤児院」と改称。北川波津、院長となる
●一九〇〇年
●二月、賛助員、桂木頼千代、院の役者となる
●「教育所」在り孤兒ノ後見職務ニ関スル法律案」可決。北川波津が孤兒の後見人になることができるようになる
●一九〇一年
●ようやく院の運営が安定。賛助員は二七〇〇名を数える
●桂木頼千代、足尾銅毒被災地を視察
●夏、三陸津波七年忌。北川波津、院児たちを引率して避難地へ募參旅行
●一九〇三年
●一月、赤坂区青山南町に移転
●一九〇四年
●日露戦争

東京孤児院への御送金は牛込原町郵便受取所宛振込を乞ふ

世は一步を進むると同時に、暗黒は其跡に随つて走る。文明とは則暗黒なりと謂ふの感なくんはあらず。今や貧富の懸隔益々甚ふして、下層の同胞日に窮乏を極む。涙あるもの誰か坐視するに忍びひや。吾人の力、固より限りありと雖、徒に現狀を株守して俾ひざるは本心に非らず。孤貧兒の自ら獲ひかたきは、就て本院に致すあらんとを。

從來本院に關する事は、使命新報を以て、報告致居候處、自今本紙を以て報告致候間、左様御了知有之度、
追て本紙は毎月十日の發行に候へども、延引今日に至り候段惡からず、御了承有之度、來號よりは間違ひなく定期に發行仕るべく候

東京市牛込區原町三丁目
七拾五番地
東京孤児院

復刻にあたって

『東京孤児院月報』は一九〇〇年、身寄りのない子どもたちのキリスト教主義の施設、東京孤児院の機関誌として創刊された。

初代院長 北川波津の理念は「孤兒を孤兒としないこと」、すなわち保護者のいない子ども一人ひとりの「家庭」を作ることであり、「收容」ではなく、ごくふつ々の家庭の子どもと同じように育て、就職・結婚して独立するまで責任を持つというものであった。そしてそれを実践しつつも負債に苦しむ北川の前に現れた強力な同業者が、二歳の桂木頼千代である。

桂木は、機関誌『東京孤児院月報』を発刊し、院の事業を社会に紹介するに際し、折からの日露戦争に対しても、戦争こそ多くの「孤兒」を生むとして決然と戦争反対を唱え、貧しい者や子どもたちの人権の視点からの主張を展開している。クリスチャン・ソーシャリストであった桂木が早逝して二年後に東京孤児院は「孤兒」の名を廃して「東京育成園」に改称する。この北川 桂木の時代に、今日まで続く東京育成園の人間愛と平和という理念の核がつけられたといえよう。

小社では、このたび東京育成園の全面的な協力のもと、「東京孤児院月報」「東京育成園月報」の創刊から一九二二年まで、及びその前身である『使命新報』を復刻する。

東京孤児院／東京育成園の歴史や理念をそこに見るだけでなく、子どもたちの言葉や絵、文章も当時の様子を伝える貴重な資料である。将来何になりたいかという問いに「有名な大工になって外国に行つてお金をもうけて日本に帰つてから貧しい人を救うのだ」と二歳の少年は答え、「親」という題に「親とは子どもを産んでかわいがつて大きくさせるもの、子どもを産まなくても、子どもをもらつてもまた親です」と七歳の少女はつづる。

子どもへの虐待がようやく社会問題化しつつある今日、そして戦争が力の対等な者どうしの戦いではなく、圧倒的な武力が無抵抗の子どもたちを虐殺することであることが自明である今、子ども福祉の原点を示す本誌の復刻は、二〇〇年を経てなお今日の意義が大きい。

社会福祉のみならず児童教育、児童文学研究、あるいは社会思想史研究、そして子ども福祉に関心を寄せるすべてのひとに提供するものである。

関連年表

- 戦争のため孤兒・貧兒の入院希望者は増える一方となるが、対応しきれない状態となる
- やはり戦争の影響で賛助員が増加せず、収入も減る
- 桂木頼千代「東京孤児院月報」に戦争反対の表明
- 一九〇五年
- 二月、慈善音楽会を開催、木下尚江が講演
- 院内に病室が完成
- 桂木頼千代、病没。二八歳
- 東北地方、大凶作
- 一九〇六年
- 二月、東北凶作地方窮民救済のために第二回臨時預児部を開設(一〇名を限度に預育すると公表)
- 岡山孤児院が無制限收容を制限(八、四名を救済)
- 一九〇七年
- 入院した児童を家族のひとりとして遇しているという意味から「孤兒」の名を廃して、東京育成園に改称
- 一月、「東京育成園月報」に改題。紙面の部に「小供新聞」が連載
- 第六回東京勸業博覧会に東京育成園からも紙布織や造花を出品。冊子「東京育成園」も出展し、園の事業に対して等賞が授与される
- 桂木が執筆していた原稿を「東京育成園」として出版
- 「東京育成園概覽」刊行
- 一九〇八年
- 九月、千葉県支部が開設
- 一九〇九年
- 内務省より慈善救済事業助成金交付を受ける。以後毎年交付
- 一九一一年
- 財団法人組織となる
- 一九一二年
- 園の顧問であり創設時から物心両面で北川を支えた二コソイ大主教死去
- 一九一三年
- 千葉県支部 新築家屋落成
- 一九一四年
- 東京府下駒沢村へ移転(現在の東京育成園所在地)
- 一九一七年
- 「回顧二十年」出版
- 「東京育成園と園母」出版
- 一九一八年
- 北川波津没

推薦します

『東京孤児院月報』の復刻を喜ぶ

吉田久一

日本社会事業大学名誉教授(故人)

東京育成園の先代松島正儀氏は、昭和を代表する社会事業家である。私と二回り先輩であるが、矢吹慶輝先生の同門であり、学生時代から指導いただき、生涯研究上も激励をうけた。沖繩戦から復員直後、国会図書館だったか、東大法学部明治文庫だったかに『月報』の破本があり、桂木頼千代の論文を読み、福祉プロパーにもこのような人がいるかと思った。

一八九二(明治二四)年の濃尾大地震、一九〇六年の三陸大海嘯、一九二二(五年)の東北凶作は、いわば明治慈善事業家の揺籃である。北川波津もその一人である。現在の福祉研究者は、慈善事業は古くさいも

のと考えるかもしれない。しかし、私は一九三八(九年)ごろ、日中戦争の中で、「人的資源の保護育成」のテーマのもとで、社会事業からヒューマニズムが消滅寸前にあるころ、頑固に慈善事業の孤塁を守った握りの人びとに共感を憶えたことを記憶している。

現代人にとって、明治の文章はすでに難物の二つである。また復刻は先人に対する敬意なしでは不可能である。そしてよい校訂こそ善本と称すべきで、後世の研究者に役立つ。幸い『月報』は、信頼する丹野喜久子さんが、校訂や解説に当たられるという。無事完結されて、それによって、私も明治慈善事業の真髄にふれたいと思う。



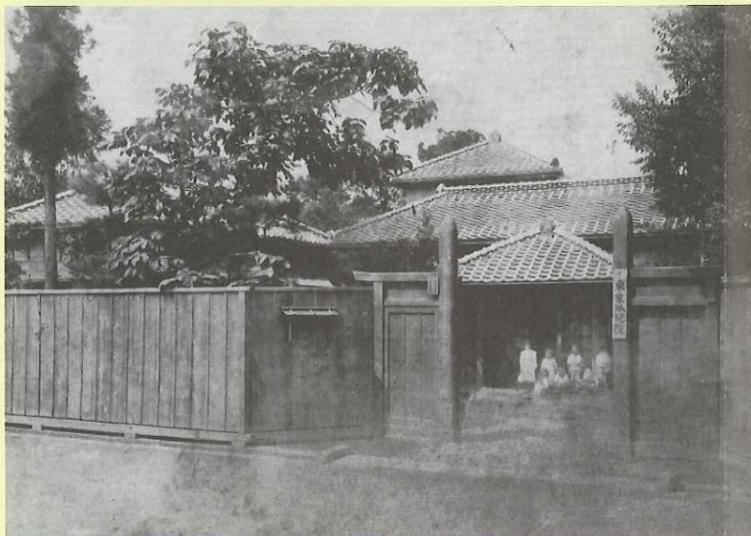
一九二四年二月。駒沢分園新築落成式



一九〇八年五月。遊戯する子どもたち



園児を背負う北川波津



東京孤児院



一九〇三年二月。中央子どもを抱えているのが北川波津、北川より向かって右ふたり目が桂木頼千代



推薦します

慈善から社会事業へ、救済から児童保護へ

仲村優一

日本社会事業大学名誉教授
日本ソーシャルワーカー協会会長

児童養護施設・東京育成園の前身である東京孤児院は二八九六(明治二九)年北川波津によって創設され、その機関誌『東京孤児院月報』が、最初は『使命新報』として二八九九(明治三三)年からの日付で発行されている。その復刻版が公刊されるのは、以下に述べる理由で、まことに意義深いものがある。

一九世紀末から二〇世紀初めにかけてのこの時代は、慈善事業から社会事業へ、孤児救済から児童保護事業への展開の時期であり、『東京孤児院月報』は、この時代の初期社会事業の姿を生々しく映し出している記録である。

また、私も社会事業の歴史に強い関心を持つ者にとっては、一九九年という年に横山源之助著『日本の下層社会』が出版されたことが忘れられない。そして、北川波津の後継者として東京育成園を育てた松島正儀が五歳の時にその生母が横山と一緒になったこと、その後六歳の時に北川波津のところに預けられたこと(これらのことは、松島自身の証言で明らかにされている)、北川の言葉の中には、信仰に根ざす児童への愛情とともに、やがて松島に受け継がれる社会問題意識と人権感覚が息づいていることなど、まことに奇縁ともいえるべき歴史的事実が、この『月報』の背後には潜んでいるのである。

北川波津

(きたがわ・はつ) 1858~1938



水戸市に生まれる。九歳のとき自由恋愛による結婚を敢行、東京で暮らす。二五歳で受洗、ハリストス正教会信徒となる。三八歳のとき離婚、「箸まで二つに分けた」といわれるほど財産を二分したが、これがのちに事業を起こす際の資金となる。

栃木の片田舎に住んでいたとき、親に死別したために娼妓となって酷薄な身上にある娘を知り、できれば親のない女の子の二三人も養い、その母となり友となりたいと願う。前年一八九六年に三陸大津波による孤児を引き取って孤児教育院を開いていた但木鶴の窮状を知ってすぐに院の役者となる。しだいに院の運営のすべてを担うようになり、同時に経済的な困窮にも独力で立ち向かうこととなる。

一八九九年、児童の院内での労働と内外協力者の寄付による賛助員制度によって運営を建て直し「東京孤児院」として再出発する。翌年より協力者・桂木頼千代を院の役者として迎える。窮乏は続くが、「教育上よろしからず」として納豆の行商を廃止。「方」幻灯部」を作った院の事業を紹介して各地を回り賛助者を募った。引き取った子どもの十二歳

桂木頼千代

(かづらぎ・よりちよ) 1878~1905



奈良県の神官の家に生まれ、二〇歳の時修学のため東京へ。江戸橋郵便局の集信人、時事新報社の配達夫、人力車夫などの労働をしながら勉学を続けていた。一八九九年下宿の近くで、朝夕納豆売りの行商をしていた八歳の院児と出会ったことから、東京孤児院の賛助員となり、翌年院役者となる。桂木は子どもたちの「兄さん」であり、北川波津のよき同労者として活躍。また「東京孤児院月報」を編集・刊行した。「東京孤児院月報」では毎号子どもの人権、貧困、平和そして「慈善」に関する論説を掲載、その求めるところは「唯一の平等」であり、水が平らで頑固偏狭でないことから「伴水」を号とした。いっぽう、幻灯機を携えて全国各地に遊説、多くの寄付金や賛助者を募った。日露戦争の折には、戦争こそ孤児を生む元凶であるとして反戦平和論「戦争と慈善」を発表する。一九〇三年腸チフスにかかり、一時回復するが肺患に侵され、一九〇五年没。葬儀では会堂に子どもたちがすすり泣く声があふれ、式が終わっても桂木の死に顔を見つめたまま立ちつくす北川に会葬者は言葉もなかったという。

〔写真の裏書き〕
「故幹事桂木頼千代氏は明治参拾参年事務員として東京孤児院の掃蕩時代より所有困難有所辛苦をも厭はず赤誠以て院母を輔けられし人なりき。あ、今氏の涙の過去の歴史を回想せば乃ち氏は参拾六年五月幹事に昇任して院舎新築費募集のため大坂へ出張し極力東奔西走したりしも不幸にして病(腸胃扶斯)の侵す所となり遂に七月帰院せられて直ちに東京伝染病研究所に入院せられぬさはれ神恩によりて日々に快に趣きて同年九月三十日幸に退院するの榮を得たりしも其の余波治まる所なく遂に又々参拾七年七月肺患の侵す所と止むなく田子の浦へ転地療養せらる。あ、氏の此所に至るに我が院にとりて最も痛切に堪へざる所なりき。さはれ其の後多少快に赴きしを以て度婦院せられしも又々病の手中を離ること能はずして参拾八年七月三日哀れや吐血して院母の腕に倒れ「あ、万事休せり最早起つ能はず」と泣けるなりき。
吁朝に生れて夕を知らざる蜉蝣も一生なれば春秋を知らざる蟪蛄も亦一生なり迷ふものは百年も短かく悟れば刹那も長しとかや。
あ、氏は実に式拾八歳を二期として満腔の希望と多大の抱負とを懐いて遂に同年十月三日此の世を去れるなりき。
此の写真は明治三拾六年四月写影しぬ。」
東京孤児院

関連図書のご案内

大谷派慈善協会刊(明治44年~大正8年刊) 救済(全9巻・別冊1)

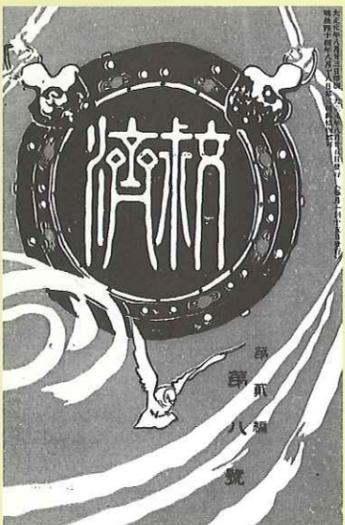
本誌は、真宗大谷派の僧・大草慧実が設立した福祉団体「大谷派慈善協会」の機関誌である。貧困者・失業者・無宿者の救済、刑期終了者の社会復帰事業、被差別部落の改善、禁酒運動、ハンセン病患者への対策、そして児童保護事業・知的障害児教育など豊富な資料が掲載されている。これまで近代社会福祉事業といえはキリスト教の活動が主に語られてきたが、仏教者の新たな事業活動の展開については十分に考察されていない。仏教社会福祉の原点として復刻する。

- 別冊Ⅱ解説(佐賀枝夏文・総目次・索引)
- 菊判・上製・総4、888頁
- 揃定価163,000円+税
- '01年10月~'02年1月配本完結(復刻版)
- 推薦Ⅱ長谷川匡俊・吉田久一

原胤昭Ⅱ主宰(明治27年~29年刊) 獄事叢書(全3巻・別冊1)

本誌は、出獄人更正事業で知られるキリスト教教師・原胤昭が、監獄を囚人懲罰でなく囚人更正のために改良しようと起こした監獄改良運動の機関誌である。発行は北海道樺戸にある集治監内の同情会。かつて筆禍事件によって自らも下獄した経験のある原は、同志社出身の教師たちを集め、監獄改良事業を展開した。北海道の監獄のニーズを掲載し、監獄改良論を披瀝すると同時に外国の監獄事業を紹介するなど、監獄改良を志す人々に情報を発信した。

- 別冊Ⅱ解説(室田保夫・総目次・索引)
- A5判・上製・総1、272頁
- 揃定価45,000円+税
- '98年9月刊(復刻版)
- 推薦Ⅱ重松 義・谷昌恒



「救済」



「獄事叢書」



「上毛教界月報」

の姉が新宿の妓楼に売られたことを知り、前借金を償却して引き取ったこともあった。

北川の子どもたちへの愛情は細やかで「お前は孤児であるけれども内が出来たのだから安心してエライ者になりなされ」の言葉にあるように、院を孤児たちの家庭とし、我が子のように慈しんで育てた。そこには孤児をとまかくも「収容」して衣食住を与える、という発想はなく、ひとりひとりに教育を与え、子どもたちが独立するまで責任をもつというものだった。北川自身は子どもを産むことはなかったが、「おっ母さん」と呼ばれ結婚し卒院した者に子どもが生まれれば「孫ができた」と喜んだ。

東京孤児院は孤児たちにとって「家庭」であり、すでにそこでは子どもたちは「孤児」ではない、として一九〇七年、名称を東京育成園と改称。一九二一年に財団法人となると園主理事となる。

柏木義円Ⅱ主宰(明治31年~昭和11年刊) 上毛教界月報(全11巻・別冊1)

群馬県安中教会の牧師・柏木義円が創刊し、四五九号にわたって月刊で刊行された「上毛教界月報」は、政府の宗教政策すなわちキリスト教への介入・利用を嫌い、臣民教育に真向から反対し、社会主義思想をも取り上げる中で、義円独自のキリスト教人間観を打ち出し、半封建的・帝國主義国家への批判を、足尾鉍毒事件や廃娼問題をはじめとする、直面する時々の問題を通じて、鋭く論じている。

- 別冊Ⅱ解説(武邦保・総目次・索引)
- A4・B5判・上製・函入・総6、200頁
- 揃定価188,000円+税
- '84年4月~'85年3月配本完結(復刻版)
- 推薦Ⅱ飯沼二郎・柏木貫一・杉井六郎・隅谷三喜男・武田清子・土肥昭夫・萩原進

住谷天来Ⅱ主宰(昭和2年~昭和14年刊) 聖化(全2巻・別冊1)

本誌は、群馬県甘楽(かんら)教会の牧師・住谷天来が十五年戦争直前の一九二七年に創刊し、一九三九年警察の命令によって廃刊を余儀なくされるまでの二年間、軍国主義の時代に刊行されたキリスト教雑誌である。批判的精神に満ちた人間尊重の思想に基づいて、日清戦争以来一貫して非戦を説いてきた天来独自の平和思想が結実した雑誌であり、「他山の石」「近きより」「嘉信」「古今今人」となる反体制・反戦争の雑誌として貴重な資料である。

- 別冊Ⅱ解説(門室園樹・総目次・索引)
- B5判・上製・函入・総8,300頁
- 揃定価36,000円+税
- '90年11月刊(復刻版)
- 推薦Ⅱ杉井六郎・鈴木範久・萩原進

東京孤児院月報

〔復刻版概要〕

全三巻・別冊一・付録一

●1899年〜1912年

A4判／B5判／四六判／上製／一、八七六ページ

揃定価＝八〇、〇〇〇円＋税 ISBN4-8350-4555-6

別冊＝解説(丹野喜久子)・総目次・索引

(別冊は分売可＝1,000円) ISBN4-8350-4559-9

付録＝東京育成園創立百周年記念 東京育成園 創立から明治・大正期

『東京育成園』(一九〇七年刊)

『東京育成園概覧』(一九〇七年刊)

『回顧二十年』(一九一九年刊)

『東京育成園と園母』(一九二七年刊)所収

(付録は分売可＝五、〇〇〇円) ISBN4-8350-4560-2

推薦＝吉田久一(日本社会事業大学名誉教授)

仲村優一(日本社会事業大学名誉教授／日本ソーシヤルワーカー協会会長)

刊行＝二〇〇三年六月

『東京育成園』(一九〇七年刊)表紙



天真備後

左に記すものは、生母の故知何なるを尋ねんとす
いしその間に對して隨時發出せる答の原文なり

施療病院 平之助(十四才)
余は幼年の時不幸も父兄を失ひ去せられ、我一人生き残り止るを得ず、孤獨に入りたり。依て我は今の母、善良なる教育を受け、醫師になり、故に先づ我國の醫學を學び、開進み、獨逸に往き、再び醫を施療し國家の爲め、施療病院を建て、貧民を報せんが爲なり。歸り、施療院を建て、之れ其恩を報せんが爲なり。一靈さんと思ふなり。 留二(一十二才)

名譽の勲死 海軍少尉トナラ
私専ら長シテ、戦争ニ行キテ、手カララアラ君ニ忠義ヲテクシ、大尉ニナリ、ス、ミテ大尉トナラ、少尉カラ大尉ニナリ、又ハ、人ヲタケ、モシワレテ、少尉カラ、又ハ、大尉ニナリ、カヒ、チカラヲ賞シキ人ヲクイ、チキノ大尉ニ名譽ノ勲死ノ限リフルイタ、カイ、國ノ爲メニ名譽ニ思フアルヲ思フ、コノ故ニ私ハ軍人ニナルコトヲ常ニ思フナリ。 徳太郎(十二才)

實民ヲ教フ爲メニ大工 徳太郎(十二才)
私ハ生長シテ大工ノ學校ニハイツテ、名譽大工ニナリテ、外遊ヘ行キ、金ヲモククテ、我國ニ大工ニナルヲ教フ、實シキ物ヲモククテ、爲メニ大工ニナルナリ。 高三郎(十一才)

生徒教育 高三郎(十一才)
生徒教育、生徒を教育して、其生長の故に、教師になつて、生徒を教育して、世にあらはれたい事です。 秀吉(十才)

傳道士 秀吉(十才)
大木クナツテ神學校へ上リ、強シテ傳道士ニナツテ神様ハナシカセ、又隊ヲウケマス。

●表示価格はすべて税別。



不二出版

T113・0023 東京都文京区向丘1・2・12
電話03・3812・4433
フアクシミリ03・3812・4464
振替00160・2・940884

11003・511006・五改